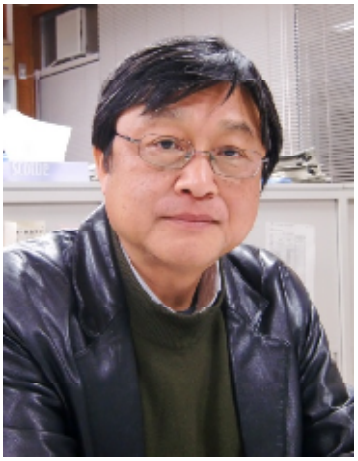
大阪大学　栗本英世教授　スペシャルインタビュー

南スーダンの現状と国際社会とのありかた



皆様、新年明けましておめでとうございます。アフリカ平和再建委員会(ARC)活動レポート 2012 年 1 月号をお送りいたします。今回は昨年 7 月に独立した南スーダン共和国に関しての内容になります。

昨年 1 月に行われた住民投票を経て、7 月に南スーダンが独立しました。しかし、現在でも戦闘が各地で頻発し、不安定な状況が続いています。今回は、大阪大学人間科学部教授の栗本英世先生に、スーダンにおける長年の調査研究の経験も含めて、南スーダンが独立に至った経緯とその現状、今後の国際社会と南スーダンの関わり方についてお話をいただくことができました。今回と次回にかけて、南スーダンの現状と今後の国際社会とのかかわりについてお伝えしていこうと思います。今回はとくに、南スーダン独立の経緯、そして現在問題となっていることを中心に報告いたします。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

― スーダンの内戦は、北部と南部の分離独立という構造はいつごろからどのようにして提唱されるようになったのでしょうか。南スーダンの独立に至るまでの経緯をお聞かせ頂いてもよろしいでしょうか。

栗本:スーダンでは第一次内戦は 1955 年から始まって、72 年に終わったわけなのですが、その第一次内戦を戦った南部の武装組織の目的は分離独立だったのです。しかし、その目的は達成できませんでした。けれども南部に自治政府を置くということで第一次内戦は終わりました。一方で、83 年から第二次内戦を始めたスーダン人民解放運動・解放軍（SPLM/A）は、分離独立を目標にはしていませんでした。というのは、1956 年の独立後の国家体制の中で、周辺化されて、差別・抑圧されていたのは、南部人だけではないからです。北部のとくに非アラブ系人たちは南部人と同じような扱いを受けていたわけです。それからいわゆるアラブ系の人たちの中でも、国家権力と結びついていたのは一部です。アラブ系の人の中でも多数の人は抑圧されていました。そういう人たちが皆で手を結んでスーダン全体を変えましょうというのが、SPLM/A の当初からの目標だったわけです。しかし、それは軍事的に政府軍に勝てなかったため、実現できなかった。結果として南部に自決権を認めるという妥協のかたちで 2005 年の包括的和平合意（CPA）を結び、第二次内戦はおわりを迎えることとなりました。2005 年の CPA では分離独立をするということは書かれておらず、南部に自決権を認めつつ、中央政府と南部政府はお互いに一つの国でいられるように努力しましょうということが書かれていました。CPA のそもそもの前提はスーダン全体の統一でした。ですが、南部に自決権が認められたので、CPA が定めた 6 年間の移行期間ののち、今年の 1 月に住民投票をした結果、圧倒的多数が分離独立を選んだわけです。

しかし、その妥協の結果、取り残された問題がありました。北部のなかの周辺化された地域の問題が解決されないままに先送りされたのです。青ナイル州、南コルドファン州と、アビエイ地域の三地域です。そしてもう一つダルフールがあるけれども、これ

と南スーダンの国境線。それよりも
た南スーダン。

はまた別の問題です。ダルフールでは、もうずっと 2003 年から内戦状態にあります。それに加わり、今年になって、北部スーダンは新しい内戦状態、要するに第三次内戦といってもいいような状態が、三地域でおこっているということです。

現在戦闘が続いている南コルドファン、青ナイル、アビエイに関してもう少し詳しく話しますと、まずアビエイに関してですが、CPA ではアビエイの人たちには自決権が認められているのです。つまり、北部と南部のいずれに属するかということを、アビエイの人たち自身が住民投票によって決めるということになっている。

スーダン人民解放軍(SPLA)将兵。全員が栗本先生の調査地に住むパリ人。帽子をかぶっているのは少佐で、栗本先生の年齢組同輩。パリ人兵士たちの求めに応じて撮影したもの。2003 年 12 月、栗本撮影。

この住民投票は本当は CPA の期間中に、南部の住民投票と同時に、今年の一月に行われるべきでしたが、まだ目途はまだ立っていません。その理由として、そもそも北と南の間で、アビエイ地域の境界の合意ができていなかったということがありました（それはハーグの国際裁判所でかなり手間取ったが決着はつきました）。それから、つぎにだれがアビエイの住民かということです。アビエイの住民は二つから構成されています。一つはディンカ人です。ディンカ人は南部で一番おおきな民族で、SPLM/A の中核を担っていたのもディンカ人です。もうひとつは、遊牧のアラブ人です。アラブ系の遊牧民たちは、もともと過去何百年もずっとアビエイを通過して、南北の境界のナイル川の川沿いまで、さらには南部にまで入って、家畜用の水と草を求めて毎年季節的に移動していました。彼らとディンカ人の間に時々紛争はあったけれども、だいたい平和的な共存関係があったわけです。内戦の間にその関係は断ち切られてしまいました。政府がアラブ系の遊牧民を武装させて民兵にし、ディンカ人を攻撃させたのです。略奪、攻撃、レイプ、女性・子どもを奴隷にして連れて行くという、ひどいことをしたわけです。現在は、SPLM のほうは遊牧のアラブ人はアビエイの住民ではないといっています。なぜなら、彼らは季節的に通過しているだけで、そこに住んでいるわけではないからです。要するに、だれが住民かによって、住民投票の結果が変わってくるわけですよね。だから、遊牧的なアラブ人をアビエイの住民とみなすかどうかという部分でまだ合意がなされていないのです。このような対立関係が内戦の影響によりできてしまった結果、普通の遊牧民は、ディンカ人が住んでいるところを通過して水と草を求めて安全に移動するということができなくなっており、ものすごく困っている。こうした状況下で現在は、アビエイに特別な国連 PKO が派遣されています。

つぎに、南コルドファンにはヌバ人という民族がおり、青ナイルには非アラブ系のさまざまな民族の人たちがいて、どちらでもアラブ系と人口的に拮抗しています。CPA ではどちらの州でも「ポピュラーコンサルテイション」を実施することが規定されています。つまり大衆の意見をきくことによって、どうするかを決めることになっています。しかし、その方法と結果の効力は明確ではなく、あいまいです。去年の 4 月に全国で総選挙があって、北部にある 16 の州のうち唯一青ナイルの住民は SPLM の人を知事に選んだ。しかし、今年の 9 月の初めに、政府軍が進攻して選挙で民主的に選ばれた SPLM の知事およびそのグループを追放しました。ハルツーム政府は一方的に新知事を任命し、SPLM の知事を支持しているアフリカ系の人たちは、ほぼ全員数万人が難民となって逃げています。一部はエチオピアへ、そして一部は南スーダンへ国境を越えて逃げている。

南コルドファンでは、去年の 4 月には選挙ができませんでした。そして今年の 5 月に一年遅れで選挙をしました。すると、公式発表ではものすごい僅差で、SPLM が負けたのです。SPLM のほうは選挙に不正があったということで結果を認めませんでした。その直後に、政府軍と SPLM の間で軍事的な衝突が起こりました。ハルツームの政府がどのような態度かというのがよくわかる例ですが、南コルドファンの知事として認めたのは、ダルフールの虐殺で ICC から逮捕状が出ている人なのです。ところで、私がスーダン全体の政府を「ハルツーム政府」というのは、現政権がスーダン人の多数を代表しているとは考えていないからです。

さて、今年になってから、南コルドファンと青ナイルで新しく発生した軍事的衝突は、政府軍と北部にいる SPLM の軍事部門、つまり SPLA とのあいだの戦いです。CPA によると、北部に SPLA がいてはいけないということになっています。北部からは SPLA が、南部からはスーダン政府軍が引き揚げると書いてあるわけです。けれども、南コルドファンと青ナイルの SPLM を支持する人たちからすると、自分たちが軍隊を持っていないとハルツーム政府になにをされるかわからない、民主主義も守れないという事実があるので、CPA に反して軍隊を温存していました。公式に言うと、それは CPA 違反になる。だからスーダンの政府は、SPLA の武装解除を強制したので戦闘が発生したのです。現在政府は、SPLM/A を支持している人たちを北部スーダンから一掃すると主張しています。

住民投票の祝賀ダンス。ジョン・ガラン廟。男性が手に掲げているのは、分離独立への投票を呼びかけるチラシ。「正義のために投票しよう」と書かれている。識字率が低い南スーダンでは、投票用紙に文字で記入するのではなく、印刷されたシンボル(握手をする二つの手は統一を、右の手のひらをこちらに向けたものが分離をしめす)を投票の際に選ぶようになっている。2011 年 1 月、栗本撮影。

― 南スーダンが独立した後に、草の根の人々の生活にはなにか影響はあったのですか。

栗本：あまりないです。というのも、2005 年の時点ですでに南部政府ができていたからです。2005 年から 11 年までは、行政機構

の確立、議会の設立、戦後の復興が進むというようなことがありました。ですので、今回の独立はまったくゼロからの独立ではなく、独立をする前に6年間の移行期間があって、その間にCPAのもとで政府も議会もできていたのです。しかし、現在の南スーダンの社会的な問題としては、南スーダン国民の間での和解、地方における過疎状態、都市と地方の格差があげられるでしょう。

まず、南スーダン国民の間の和解というものが確立していないということです。それは二つの問題がある。一つはおおくのの市民あるいは村人は武装しており、彼らが、隣の集団を攻撃したり、掠奪したりする事件が頻発している。それはものすごく規模が大きくて、今年にはジョングレイ州で、一回に何百人も死ぬというような事件が起きています。こうした襲撃は、組織された武装集団ではなく、普通の人がやっているということになっています。二つ目に、組織された武装集団による攻撃、およびSPLAを含む武装集団どうしの衝突があります。これには、現状に不満を抱く一部のSPLA将兵が起こしている反乱も含まれます。これらの問題を解決して、和解を達成しないといけないと思います。こうした紛争の背景には、内戦中に南スーダン人自身が敵と味方に分断

新築のマンション。2007年。南スーダンの首都ジュバは建設ラッシュである。内戦終結まで2階建て以上の建物はほとんどなかった。栗本撮影。

されて、お互いに殺しあったという事実があります。そのため、コミュニティの内部とコミュニティ間の平和的な共存関係が内戦の影響で途絶えてしまっている。内戦中に分断され殺しあった関係が、現在に至るまで修復していない状態です。極端な場合は、隣の村にもいけなくなるわけです。すると、いろんな生きていくための活動に不便が生じます。南スーダンの田舎では賃金労働がまだ普及していません。普通の人は皆自分で食料を生産し獲得しています。これを、生業経済と呼びます。つまり、畑を耕したり、家畜を飼育したり、魚を捕ったり、狩猟採集をしたりして生きています。ローカルなレベルで平和回復していないと、こうした活動が十分におこなえないのです。畑を作る、牛を飼う、薪拾いに行く、食用になる野生植物とりに行くにしても、かなり広い地理的範囲で行っています。一つの村があるとしたら、そこから半径10キロから20キロの地域で活動するわけです。だから、そこを安全に移動するためには、その地域の平和が確立している必要があるわけです。外にでたら、隣の民族に殺されるという状態であれば、広い地域を移動できないでしょう。しかし復興開発の現状としては、国連、国際NGO、南スーダン政府は、そういった問題

ジョン・ガラン。SPLM/Aの創始者、議長兼最高司令官。和平交渉の舞台であったケニア・ナイバシャのホテルにて。2004年1月。

を解決する方向でのプログラムやプロジェクトをあまり推進していません。現段階では主としてインフラ面、そして政府のシステムを作るという方向に力点が置かれています。

つぎに地方における過疎の問題です。その理由は二つあります。一つは、仕事を求めて都市に出かけるということです。そしてもう一つは、内戦中に難民や国内避難民になった人たちが村に帰っていないということです。労働力が不足しているので、生計を立てるのが難しくなっています。村レベルの生活の復興、村がある地域社会の復興もまだあまり進んでいないのです。

現実には以上のような事実が存在していますが、中期的にみて重要なのは、活動が低下している生業経済が再構築、再活性化されることでしょう。現在は農村でも生業経済がうまくいっていない状況なので、食料は自給できていません。生業経済が再構築され、発展してくると余剰生産物や獲得物が生まれ、自然に市場経済とつながるでしょう。必要最低限の生活でも、商品の購入は必須です。服や石鹸、塩などマーケットに行かなければ買えないものがあります。ですので、生業経済を立て直して、余剰生産物を

自動小銃 AK47(カラシニコフ突撃銃)をもったナーリム人の牧童。家畜の日帰り放牧に付き添う牧童はかならず武装している。身に一糸もまとっていない少年が持っているのは銃だけである。AK47は、現在の南スーダンでもっともひろく普及している軽火器である。旧ソ連と東ヨーロッパ製のほか、中国製のものもある。19 世紀中期以降現在にいたるまで、南スーダンの人々が経験した「近代」あるいは「外部世界」とはすなわち「銃」および「軍隊」のことであった。2004年、1月、栗本撮影。

マーケットに持って行って収益を得られるようになれば、地方の人も経済的に少し余裕ができるのではないでしょうか。

最後に、都市と地方とのあいだに存在する復興の段階の大きなギャップという問題があります。全体的にはまだまだ不足はしているが、過去 6 年間のあいだに道路がよくなったり、学校、小学校、診療所、役所の建物が地方レベルでもできてきました。しかし復興のプログラムというのはなかなか村レベルまで到達していません。外部からものすごいお金が入ってきたこと、そして、南部スーダン政府には石油収入に由来するかなりの程度の予算があることから、都市は戦後復興経済ブーム、復興景気です。しかし、それで儲けているのは一部の人、および外国人です。ウガンダ人、ケニア人、エチオピア人といった人たちが、商人、起業家として南スーダンに入ってきて儲けています。お金が南スーダン内部に留まらず、流れて出てしまっている状態です。そうすると国民にわたるお金もなくなってしまう。政府の高官も腐敗と汚職を通してものすごく儲けている。こうした現象は都市に集中しています。

都市と地方の格差は過渡的な現象かもしれません。いきなり復興開発を田舎から始めるわけにはいかないから、まずは都市から始めて、だんだん地方の方にも及んでいくというのであればそれはそれでいいのです。しかし今のところ、格差が是正されるというよりは広がっているというのが現状です。というのも、地方の治安が回復していないので、復興開発もできないです。それから、道路がないところでも復興開発ができない。だから、ある種の悪循環でもあるわけです。インフラが整備されていない、治安が悪い、だからできない、都市では復興・開発が進行するが、地方はいつになっても低開発のままという悪循環になっているわけです。まともな小学校も診療所もなく、道路は通じておらず、清潔な飲料水も十分ではないといった状態の村が多数あります。そうするとまた、ますます都市に人が集まってきて、地方の過疎が進んでいくという状況になってしまいます。　　(次号につづく…)

年、栗本撮影。

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

お忙しい中、非常に丁寧にインタビューに答えてくださいました栗本英世先生、本当にどうもありがとうございました。

今回は南スーダン独立の経緯と現状に焦点を当てて皆さんにお伝えしました。次号では、現在活動中の UNMISS、南スーダンと国際社会のかかわり、栗本先生の昨年 9 月の現地調査、今後の南スーダン援助のありかたについて栗本先生にお伺いし、今までの支援を振り返り今後の指針を提示した国際 NGO 連合のレポート「最初からきちんとやろう」の 10 のポイントを取り上げたいと思います。

ではみなさん、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

ARC インターン　妻木円香

インターン 妻木円香

0 年、和歌山県海南市に生まれ
亀川中、智辯学園和歌山高校を
現在大阪大学の 3 年生。高校
ころから国際協力に興味を持つ
大学 1 年に参加した海外ボラン
ア活動を機会に、本当に人々を
せ」にする活動とはどのような
なのかということに向き合いな
現在に至る。大学では元子ども
に勉強をしている。

アフリカ平和再建委員会

Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN

〒160-0004　東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511

Tel/Fax:03-3351-0892　E-mail:headoffice@arc-japan.org

ホームページ　http://www.arc-japan.org

ツイッター始めました！アフリカの紛争と平和に関するイベントや情報の発信をしています！

@ArcJapanNews

どんどんフォローしてください！

フェイスブック始めました！

日ごろのARCの活動内容や、アフリカに関連するイベントや情報の発信をしています！

【ARCページ】

http://www.facebook.com/ARCJAPAN

【コンゴに平和な選挙を2011】

http://www.facebook.com/drc.peacefulelection2011

このページに「いいね！」をお願いします！

Facebook 上で「シェア」して情報を広めてください！